

研究者の立場から

まつお・たかよし

研究所生活も13年になるが、それは私にとって図書館通いが13年つづいていることを意味する。歴史が浅く、したがって蔵書の不備な（もちろん東方文化研究学院以来の中国関係文献は別だが）人文研では、付属図書館はじめ各学部の図書の厄介になるよりほかはないのである。こうして、今頃では、付属図書館などは、³「勝手知ったる他人の家」のようになってしまった。

この間、たしかに図書館のサービスはよくなった。もとは付属図書館の書庫には入れなかったし、学部の図書室も、部外者には決してよい顔をしなかった。今でも忘れないが、ある学部の図書室員に、人文はよその学部の人に貸さないのに、借りに来るとはあつかましい、と面と向っていわれたことがある。仕方なく、いろんなコネをたぐって、他人名義で借出したものだ。これが五・六年前にすっかりかわって制度上にもずい分利用しやすい状態となり、係員の態度も変わった。こちらは恐縮するほど親切に扱われることがしばしばあるくらいである。

ただ、設備の点について、甚だ不満足なことが一つある。付属図書館はじめ、各学部の書庫がせまくなり、利用度の少ない図書を旧書庫と称する土蔵造りの別棟に収容していることが、それである。筆者のような、図書館利用の玄人（くろうと）にとっては、この別棟入りの図書がなくては仕事にならない。そこで注文を受けた係員は、雪が降ろうが雨が降ろうが、旧書庫に行って、大冊の新聞・官報・人名録の類を選び

出さねばならない。ことに冬など、旧書庫の寒さは格別である。電燈の光も極度に乏しい。こんな事情を知っている当方として、甚だ気がひけるのである。図書館がたんに学生のためのみでなく、研究者のために存在するものならば、すみやかに、この事態は改善されねばならぬはずである。せめて新聞だけでも図書館に移し、書庫の中で読めるようになれば、利用者と職員双方にとって、また運搬するごとにいたむおそれの多い新聞の寿命にとって、どれだけ助かるかわからない。

これというのも、付属図書館に限らず、どこの学部の図書室でも、大学の機構の中で余りにも冷遇されているからだと思う。付属図書館の書庫の増築のうわさを聞くことすでに久しい。ところが、いまや学内に雨後の筍のように、大へん立派なビルが立ち並びつつあるのに、付属図書館だけは旧態依然である。研究の基幹部分たる図書館が、設備不完全のまま放置されていることは、何かわが京都大学の文運を象徴しているようにみえる。大学当局の英断を望む。

このほか蔵書の補充、たとえば雑誌の欠号を埋める、というようなことも大学の図書館たる以上綿密にやってもらいたいことである。夢を語れば、各学部の図書室は廃止して、中央に資料館をかねる一大図書館を建設し、図書館職員の養成所や、図書館学の大学院コースなど付置するところまで行ってほしいものだ。蔵書と館員の集中化により、現在と同じくらいの図書関係予算でも、格段の効用を発揮することができるだろう。一つ70周年記念事業として、それが無理なら80周年をめざして、計画してみませんか。大体育館みたいなものを建てるより、よほど気がきいていると思うが如何。

（人文研）